

10-SK050 (第7-77図)

遺構の保全

S62～T63区に位置する遺構である。現状での遺構の平面形態は不整形で、その規模は東西5.2m、南北5.8mを測る。遺構が保全される地点であるため、掘り下げを行っておらず、遺構の深さは不明である。遺構検出のプランから大型の土坑が複数重複している可能性が考えられる。15世紀代の溝10SD140に切られている可能性が高いが、これについても周辺の土壌と埋土が類似しているため、将来の課題としておきたい。遺構の検出上面から少量の遺物が出土しており、それらはいずれも14～15世紀以前に比定される。遺構の年代については、未調査のため保留しておきたい。

未調査

10-SK050出土遺物 (第7-78図)

1は土師質土器で、底部外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。2は中国産の白磁碗の底部と思われる製品である。3は中国産の青磁碗の口縁部で、外面に片彫りによる連弁文が認められる。4は中国同安窯系青磁碗で、外面に櫛状工具による直線文、内面に片彫りによる文様と櫛状工具によるジグザグ文が施されている。5は瓦質土器で、土鍋の胴部と思われる破片である。外面下半部に格子目叩きが施されている。6は管状土錘で、完形品である。7は軒丸瓦の破片である。

10-SK051 (第7-79図)

W63～W64区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形を呈する。その規模は東西1.8m、南北2.6m、深さ0.35mである。16世紀後半の土坑10SK049と切り合い関係を有し、この土坑を切って構築されている。埋土には拳大から頭大の礫を多く含むほか、瓦や土器片などが少量含まれる。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。

10-SK051出土遺物 (第7-80図)

1は土師質土器の坏で、底部外面には糸切り痕が認められる。14世紀代の遺物で、遺構の年代と合わないことから混入品であろう。3は瓦質土器の塊で、胴部内面に放射状のヘラミガキが施されている。在地系の製品と推定され、16世紀後半に比定される。3は埴であるが、端縁に対して斜め方向に、凸面と凹面双方から分割線が施されている。これに対応する側面には、分割断面と分割破面が認められる。

10-SK052 (第7-79図)

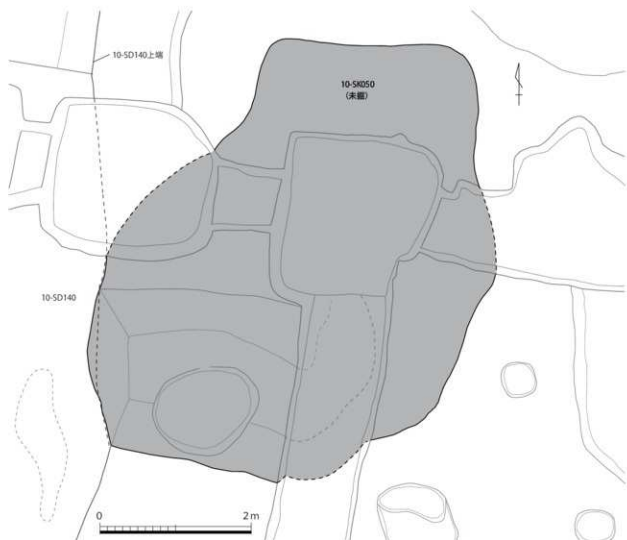
W63～X63区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形を呈する。その規模は東西2.2m、南北1.8m、深さ0.2mである。16世紀後半の土坑10SK049と切り合い関係を有し、この土坑を切って構築されている。埋土には拳大から頭大の礫を多く含むほか、瓦や土器片などが少量含まれる。出土遺物などから、遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。

10-SK052出土遺物 (第7-81図)

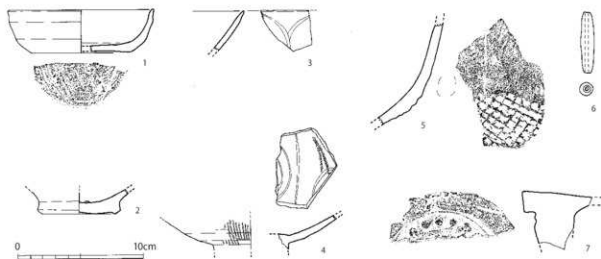
図示した遺物は瓦質土器の塊である。16世紀代に比定される在地系の製品で、内面にヘラミガキが顕著に認められる。

10-SK061 (第7-82図)

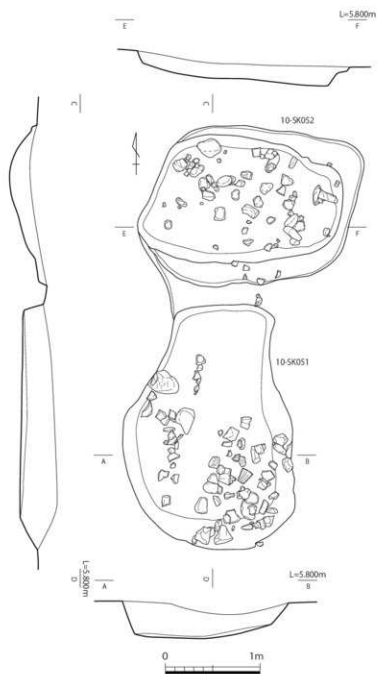
AC63区に位置する小規模な遺構で、ピットが3基連なったような形態を呈する。10SK061とした遺構の規模は、東西0.35m、南北0.36m、深さ0.22mである。小規模な遺構であるが、埋土中から土師質土器の小皿が6個体以上、坏が3個体以上のほか、瓦片が出土した。本来、柱穴(ピット)出土の遺物に属するものであるが、発掘時に土坑として調査したことから、本項目で報告する。隣接する10SK062も同じような時期で、同じような遺物の出土状況を呈することから、本来は一連の遺構であったのかもしれない。遺構の時期は、Ⅰ期(14世紀前半)である。



第7-77図 10-SK050実測図 (1/50)



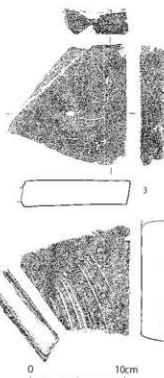
第7-78図 10-SK050出土遺物実測図 (1/3)



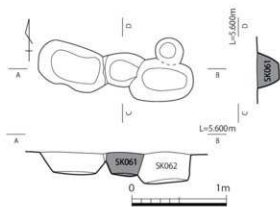
第7-79図 10-SK051・10-SK052実測図 (1/50)



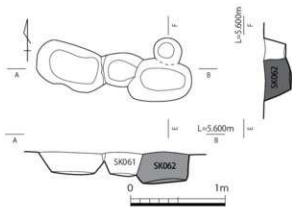
第7-81図 10-SK052出土遺物実測図 (1/3)



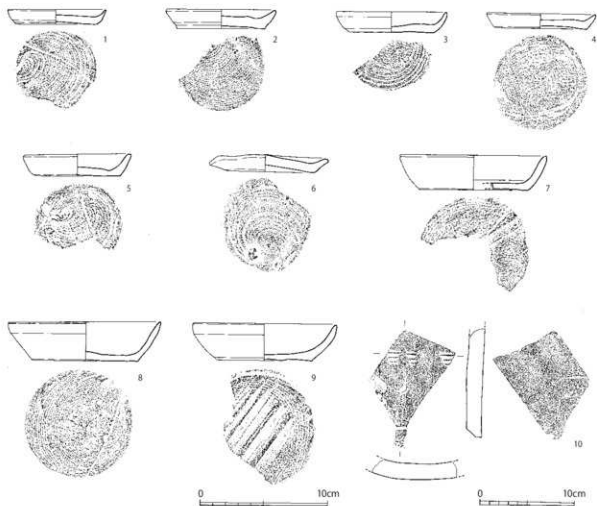
第7-80図 10-SK051出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第7-82図 10-SK061実測図(1/40)



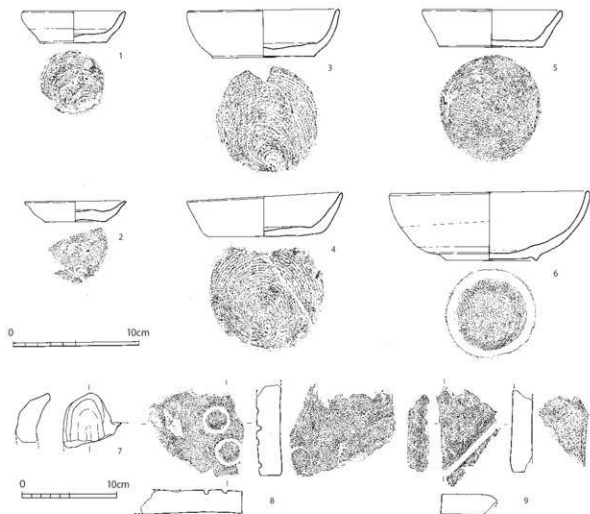
第7-83図 10-SK062実測図(1/40)



第7-84図 10-SK061出土遺物実測図(1/3)

10-SK061出土遺物(第7-84図)

1～6は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕が認められる。この中で、5は口縁部が外傾気味に立ち上がり、器高がやや深い器形を呈する。7～9は土師質土器杯で、7・9の底部外面には糸切り痕と板状圧痕、8の底部外面には糸切り痕のみが認められる。このうち、9は口縁部がやや内傾し、体部に丸味をもつ資料である。10は平瓦で、四面に「三」字状の文様が認められる。



第7-85図 10-SK062出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK062 (第7-83図)

AC63区に位置する小規模な遺構で、ピットが3基並んだような形態を呈する。10-SK062とした遺構の規模は、東西0.6m、南北0.4m、深さ0.35mである。北側で小規模なピットと切り合いを有するが、遺構の前後関係を明らかにできていない。小規模な遺構であるが、埋土中から土師質土器の小皿が2個体以上、坏が3個体以上のほか、混入品と思われる瓦器境などが出土した。本来、柱穴（ピット）出土の遺物に属するものであるが、発掘時に土坑として調査したことから、本項目で報告する。隣接する10-SK061も同じような時期で、同じような遺物の出土状況を呈することから、本来は一連の遺構であったのかもしれない。遺構の時期は、1期（14世紀前半）である。

10-SK062出土遺物 (第7-85図)

1・2は土師質土器小皿で、外面には糸切り痕が認められる。3～5は土師質土器坏で、底部外面については4には糸切り痕のみ、3・5には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。このうち、3は口縁部がやや内傾することで体部に丸味をもつ資料で、14世紀前半に比定される。6は瓦器境で、断面形態が小さな三角形を呈し、高台内には静止糸切り痕が認められる。体部内外面のヘラミガキは顕著ではなく、ナデ調整が主体となる。在地系の製品で、12～13世紀に比定される資料であることから混入品であろう。7～9は瓦埴類で、7・8は鬼瓦、9は埴である。9は三角形形状に加工されている。

10-SK068 (第7-86図)

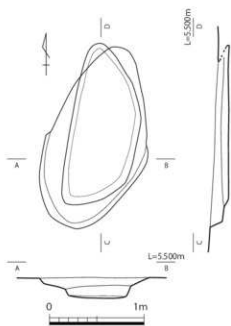
S63区に位置し、東西1.1m、南北1.95m、深さ0.2mの土坑として認識した遺構である。当該遺構は10-SK150とした大型土坑と重複しており、遺構の壁がオーバーハングしたり、壁内に遺物が含まれているなど、単独の土坑としては不自然な点が多い。これは10-SK150とした遺構内の埋土を単独の別遺構として認識してしまった可能性が高い。率直に言えば、発掘調査時の誤認である。遺物には、土師質土器と瓦片などがあるが、これらは本来10-SK150とした遺構の帰属遺物であろう。

発掘調査時の誤認

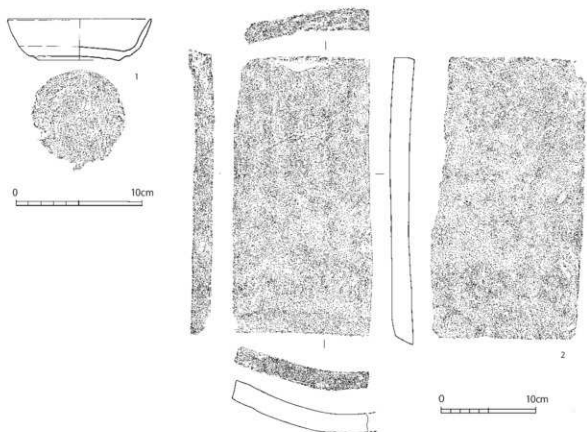
10-SK068出土遺物 (第7-87図)

1は土師質土器で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕が認められる。2は平瓦であるが、完形の平瓦を焼成後に意図的に分割して長方形に仕上げていることから、当該資料は製斗瓦として使用されたものであろう。側面のひとつは分割された破面のままとなっている。凹面には連続した「X」字状の文様がある。

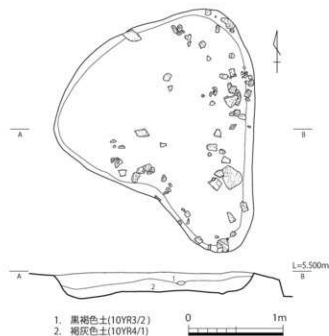
製斗瓦



第7-86図 10-SK068実測図 (1/40)



第7-87図 10-SK068出土遺物実測図 (1/3、1/4)



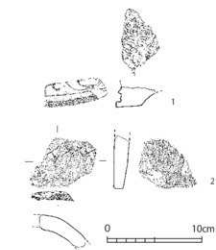
第7-88図 10-SK070実測図(1/40)

10-SK070 (第7-88図)

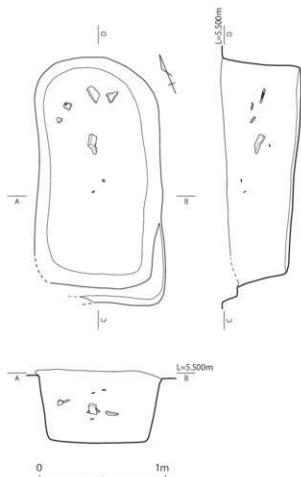
S66区に位置する遺構で、発掘調査時に認識した遺構のプランは不整形を呈する。その規模は東西2.1m、南北1.6m、深さ0.2mである。埋土には焼土・土壁・礫・瓦などが多量に含まれる。発掘調査時には埋土の僅かな違いを識別して遺構のプランを検出したつもりであったが、埋土と同様な土壌が遺構外にも広がっており、完掘後の状況が明らかに不自然である。検出当初の遺構プランにこだわり、掘り下げを進めてしまったため、発掘調査の結果と遺構の実態がかけ離れたものになった可能性が高い。遺構の周辺は遺跡の保存のため、保全されている。以上のような不備のため、遺構の時期は不明としておきたい。

10-SK070出土遺物(第7-89図)

1は軒平瓦の破片で、顎貼付技法が観察できる資料である。破断面には、平瓦部との接合を強固にする工夫が施されている。2は丸瓦で、凸面に「×」字状の文様が認められる。



第7-89図 10-SK070出土遺物実測図(1/4)



第7-90図 10-SK072実測図(1/30)

画定の
不備

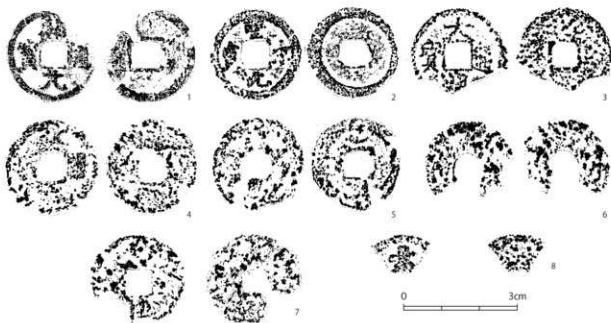
10-SK072 (第7-90図)

X64区に位置する遺構で、その平面プランは略長方形を呈する。その規模は東西1.0m、南北1.8m、深さ0.53cmである。周辺の遺構と切り合い関係などは認められなかった。埋土は暗褐色の単一土層であり、埋土中位から上位にかけて土器片や銅銭が出土した。銅銭の枚数は8枚以上である。遺構の形態や銅銭の出土などから、当該遺構が墓である可能性を考えたが、骨片などの出土や棺の痕跡を認めることはできなかった。出土遺物の中に、遺構の詳細な年代を特定できるものがないため、その年代は不明である。

墓の
可能性

10-SK072出土遺物 (第7-91図)

1～8は銅銭である。鋳出は激しく、大半のものが銭文を判読することができないが、銭種が判明するものとしては、「開元通寶」(唐・621年)、「聖宋元寶」(北宋・1101年)・「大観通寶」(北宋・1107)がある。銅銭のほかには、図示可能な遺物は認められない。



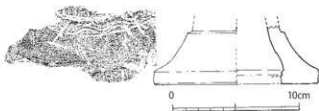
第7-91図 10-SK072出土遺物実測図 (1/1)

10-SK078

X63区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略円形を呈する。その規模は東西0.84m、南北0.82m、深さ0.6mである。西側に時期不明の土坑があり、この土坑を切って構築されている。遺構の検出上面から埋土上位にかけて、拳大の礫が集中しており、礫の間から土器類が少量出土した。埋土の下位は土壌となり、遺物や礫をほとんど含んでいない。遺構の性格は不明で、出土遺物が僅少であるため、遺構の時期は不明である。

10-SK078出土遺物 (第7-92図)

図示した遺物は、瓦質土器の製品である。器種不明であるが、花瓶の脚部である可能性がある。外面に櫛描波状文、脚端部外面に雷文の刻印が施されている。



第7-92図 10-SK078出土遺物実測図 (1/3)

10-SK081 (第7-93図)

X63区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略円形を呈する。その規模は東西0.8m、南北0.75m、深さ0.19mである。遺構南側の底面に小型のピットが認められるが、人為的な遺構ではなく、植物の根などの痕跡である可能性が高い。埋土中から礫や瓦片が出土しているほか、底面近くから茶臼が正位で出土している。茶臼は鈎部が欠損するなど、意図的に加工が加えられている。また、礫や瓦片、茶臼は被熱により赤変している。遺構の詳細な時期を判別できるような出土遺物は認められない。

10-SK081出土遺物 (第7-94図)

図示した遺物は、砂岩質の石材を使用した茶臼の下臼である。鈎部が欠損するほか、掘目が施されている部位や底部の一部が欠損している。これらの欠損は、意図的な打ち欠きによるものである可能性も考えられる。また、全体が被熱により、赤変している。

茶臼下臼
意図的な
打ち欠き？

10-SK085 (第7-95図)

R61区に位置する土坑で、遺構の平面プランは不整形形を呈する。その規模は東西1.1m、南北1.15m、深さ0.35mである。埋土は暗褐色の単一土層で、小さな石(玉砂利ではない)を含む。遺構の検出上面から凸面を上に向けた状態で丸瓦が2枚出土した。これらは広端面と玉縁が付いた側が互い違いになるように並べて置かれていたので、土坑上面に意図をもって置かれていた可能性が高い。また、丸瓦はいずれも被熱している上に、玉縁の一部が欠損しており、土坑に置かれた際にも完形品ではなかったことがうかがえる。これらとほぼ同じレベルから瓦の破片や土器片も出土した。埋土の中間から下位からは、遺物は出土していない。いずれにしても、特異な遺物の出土状態といえるが、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物から、遺構の時期はⅡ期(14世紀中葉～後半)に比定される。

丸瓦2枚が
並べて置か
れていた

10-SK085出土遺物 (第7-96図・第7-97図)

第7-96図1・2は土師質土器坏で、1の底部外面には糸切りの痕跡が残っている。3は土師質土器土鍋の口縁部である。

第7-97図4・5は丸瓦である。いずれも玉縁の一部が欠損する。被熱しているためか、全体の色調は赤褐色を呈する。凸面には縄目叩き、4の凹面には吊り紐痕や布目痕、5の凹面には吊り紐痕と糸切り痕(コビキ痕)が観察できる。

10-SK091 (第7-98図)

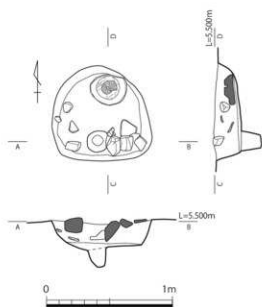
R61区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略円形となる。その規模は東西1.18m、南北1.3m、深さ0.45mである。埋土は単一の暗褐色土であり、埋土上位から瓦片や土器片が出土した。出土遺物の中に、遺構の年代を確定できる資料はない。

10-SK091 (第7-99図)

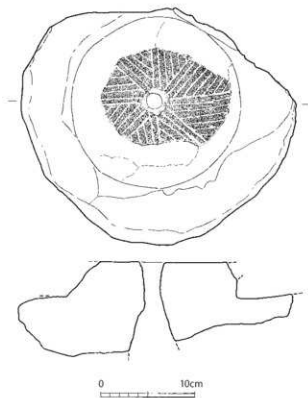
1・2は巴文軒平瓦、3は軒平瓦の破片である。

10-SK093 (第7-100図)

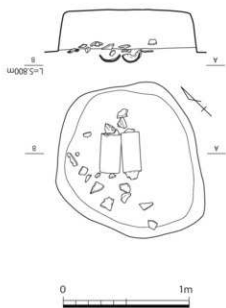
P61区に位置する土坑で、遺構の平面プランは楕円形を呈するものと推定される。現状での規模は東西1.8m、南北1.5m、深さ0.15mで、遺構の北側は調査区外となる。遺構の深度は浅いが、そのほぼ中央部より遺物がまとまって出土した。出土遺物には土器片・瓦片が一定量出土したほか、少量の礫と白色の小石(玉砂利)が少量認められた。ただし、出土遺物の中に、遺構の年代を確定できる資料はない。



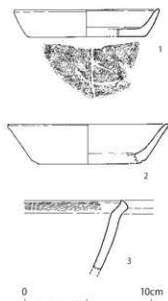
第7-93図 10-SK081実測図 (1/30)



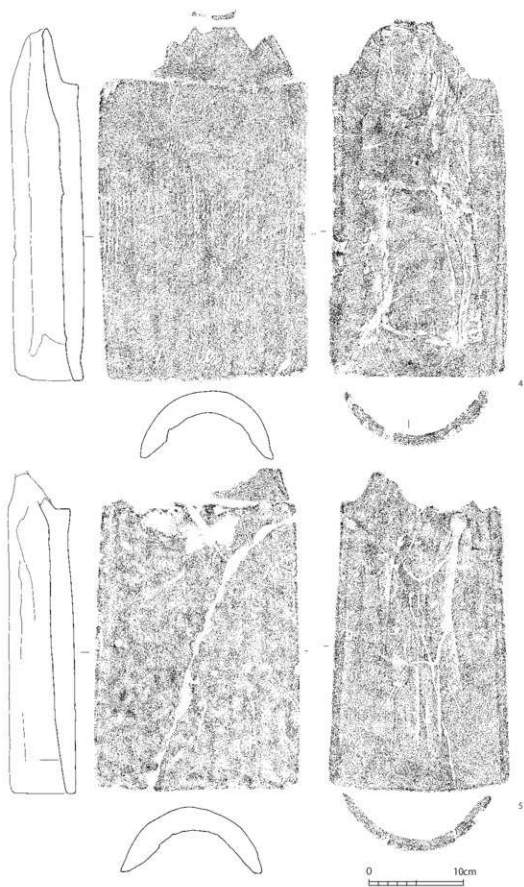
第7-94図 10-SK081出土遺物実測図



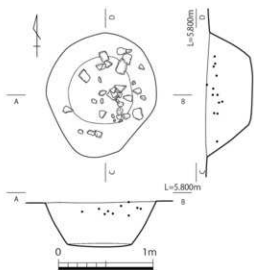
第7-95図 10-SK085実測図 (1/30)



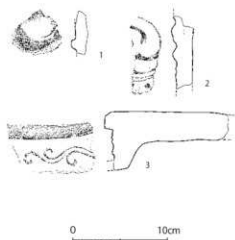
第7-96図 10-SK085出土遺物実測図① (1/3)



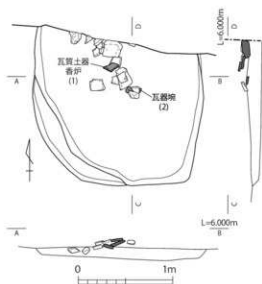
第7-97図 10-SK085出土遺物実測図② (1/4)



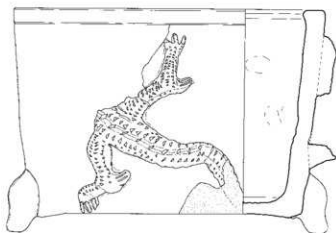
第7-98図 10-SK091実測図 (1/40)



第7-99図 10-SK091出土遺物実測図 (1/4)



第7-100図 10-SK093実測図 (1/40)



第7-101図 10-SK093出土遺物実測図 (1/3)

10-SK093出土遺物 (第7-101図)

「万寿寺」
のへら描き
文字のある
瓦質土器
大型香炉

1は瓦質土器の大型香炉で、胴部外面には立体的に造形されている龍が貼付されている。また「万寿寺」のへら描き文字が施されている。共存遺物が不鮮明なため、詳細な製作年代を知ることができないが、注目すべき資料である。2は瓦器塊で、胴部外面下半部にヘラミガキ、内面に指圧痕が認められる。12～13世紀代に比定される資料で、混入品であろう。

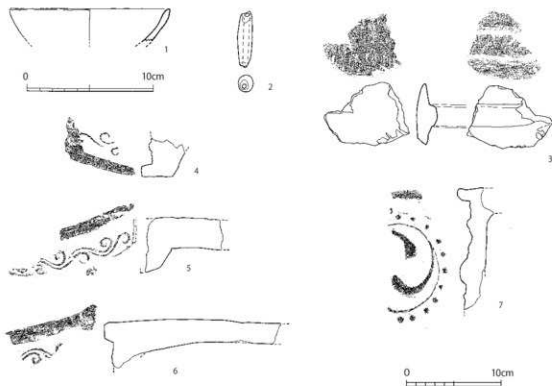
10-SK095

T66区に位置する大型の土坑で、遺構の平面プランは不整形を呈する。その規模は東西4.0m、南北5.0m、深さ0.3mである。大型の遺構であるが、複数の土坑が重複していたのか、あるいは単独の大型土坑であるのか、掘り下げ時の観察が不十分であるため、判断できていない。また、発掘現場では15世紀代の溝10SD140から切られ、かつ15世紀後半の土坑10-307を切って構築されたと解釈したが、互いの埋土が類似して、判別が難しかったため、最終的な結論は保留しておきたい。埋土からは瓦類を主体とした遺物が多量に出土した。遺構の性格は廃棄土坑であるが、土器類などの遺構の詳細な年代を確定できる資料は、少量に留まる。上記のような状況から、遺構の年代は不明としておきたい。

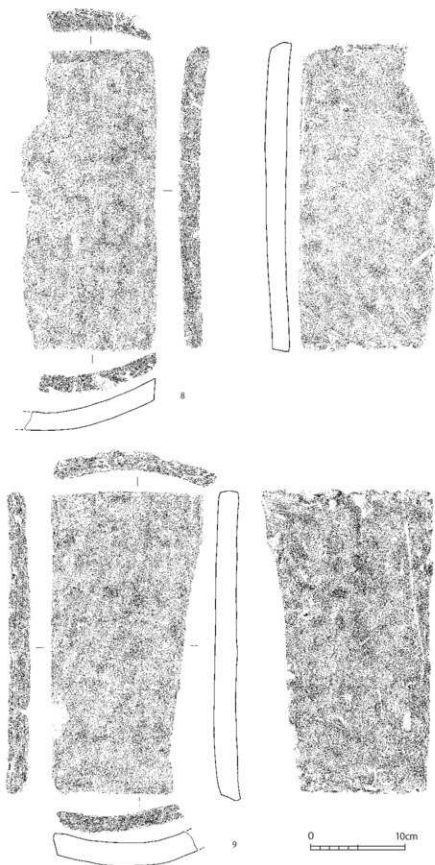
10-SK095出土遺物 (第7-102図・第7-103図)

1は土師質土器で、底部を欠損する。2は管状土錘で、上端部に僅かに欠損部が認められる。3は滑石製石鏡の口縁部破片である。4～6は軒平瓦、7は軒丸の破片である。8・9は平瓦であるが、平面観が長方形形状を呈し、破損した部位が直線状を呈し、側縁と平行する様相が認められる。以上のことから、当該資料は平瓦を2分割することによって製作された製斗瓦である可能性が高い。

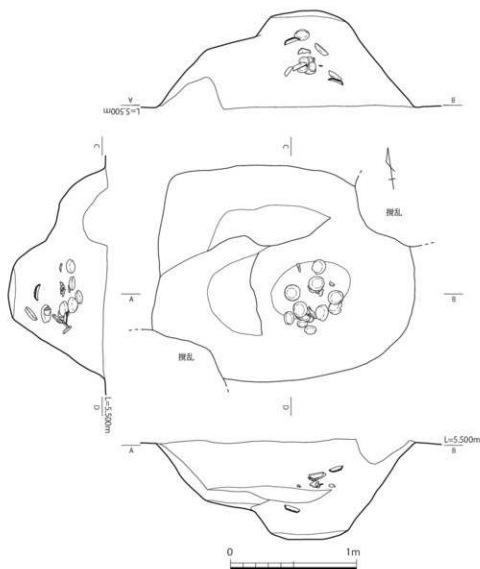
製斗瓦



第7-102図 10-SK095出土遺物実測図①(1/3、1/4)



第7-103図 10-SK095出土遺物実測図② (1/4)



第7-104図 10-SK121実測図 (1/30)

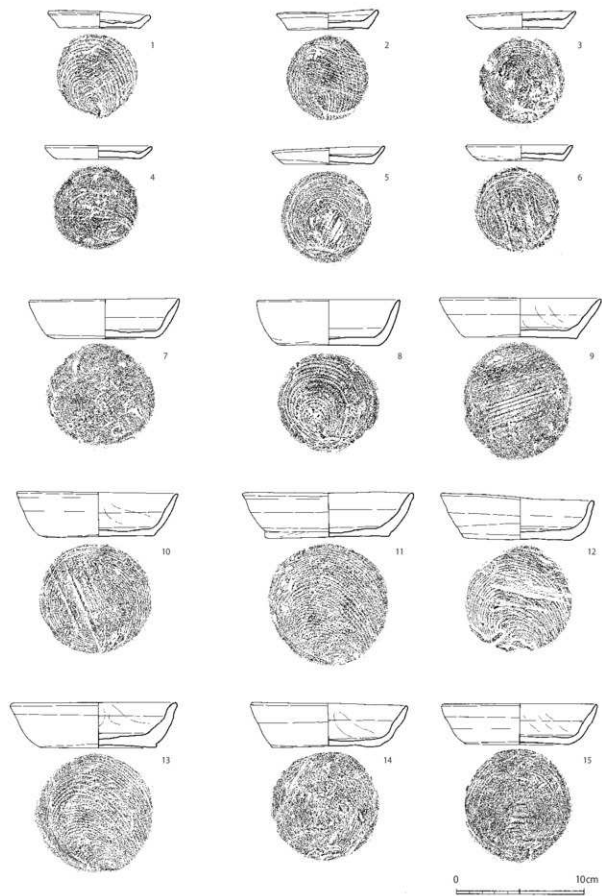
10-SK121 (第7-104図)

W66区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略楕円形を呈する。その規模は東西205m、南北1.7m、深さ0.75mである。埋土は暗褐色系の土壌で、炭化物などを少量含む。完掘時の状況から、複数の遺構が重複している可能性もあるが、土器類の出土地点はまとまりを見せている。埋土の中位から下位にかけて、土師質土器の坏や小皿がまとめて廃棄されたような状態で、一括して出土した。小皿や坏の中には明瞭な形でススが付着する資料はなく、すべてが食器として使用された可能性が高いと考えている。遺物は時期的にもまとまっており、良好な一括資料と評価できる。出土遺物から、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～後半)に比定される。

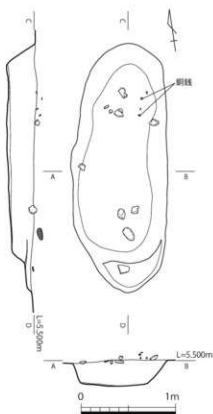
10-SK121出土遺物 (第7-105図)

1～6は土師質土器小皿、7～15は土師質土器坏である。底部外面には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる資料が多く、8・11・13については糸切り痕のみが認められる。

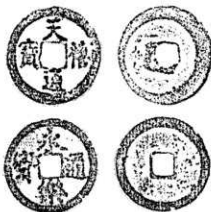
良好な
一括資料



第7-105図 10-SK121出土遺物実測図 (1/3)



第7-106図 10-SK130実測図 (1/40)



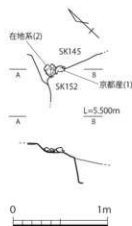
第7-107図 10-SK130出土遺物実測図 (1/1)

10-SK130 (第7-106図)

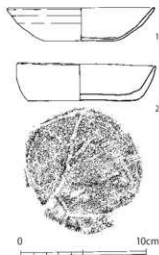
V66区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略楕円形を呈する。その規模は東西1.0m、南北2.6m、深さ0.26mである。埋土は暗褐色系の単一土壌で、炭化物などを少量含む。遺構の検出上面から埋土上位にかけて、礫や土器片、瓦片、銅銭などが少量出土した。土器や瓦の中には、遺構の詳細な時期を示す資料は存在しない。ただし、遺構の時期については、永楽通寶が出土していることから、少なくとも15世紀以降に比定される。

10-SK130出土遺物 (第7-107図)

1は初鑄造年1017年の北宋銭「天徳通寶」、2は初鑄造年1408年の明銭「永楽通寶」である。



第7-108図 10-SK145実測図 (1/40)



第7-109図 10-SK145出土遺物実測図 (1/3)

永楽通寶
初鑄造年
1408年

10-SK145 (第7-108図)

U65区に位置する遺構で、京都産土師器と在地産土師器が並んだ状態で出土したものである。本来は土坑、あるいは土器溜め状の遺構であったと推定されるが、近年の病院施設などの構築によって攪乱を受け、本来の形態や規模は不明である。図示した2個体の土器は、原位置を動いていないものと解釈した。また、後述する10-SK152の出土資料は、この遺構に帰属していた遺物であると考える。出土遺物の年代観から、当該遺構は1期(14世紀前半)に比定される。

搬入のため、
遺物の
形態や規模は
不明

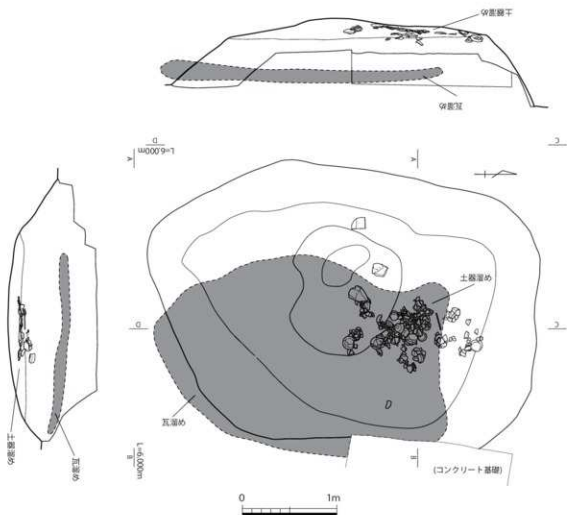
10-SK145出土遺物 (第7-109図)

1は京都からの搬入品と推定される資料で、京都産土師器皿Sである。2は在地系の土師質土器環で、底部外面には糸切り痕がナデ消されている痕跡が観察できる。

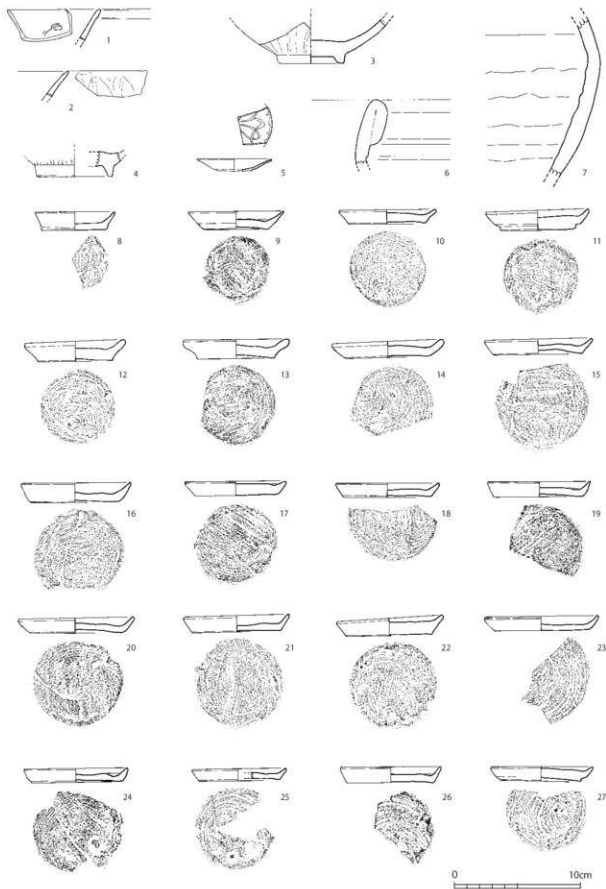
京都産
土師器皿S

10-SK150 (第7-110図)

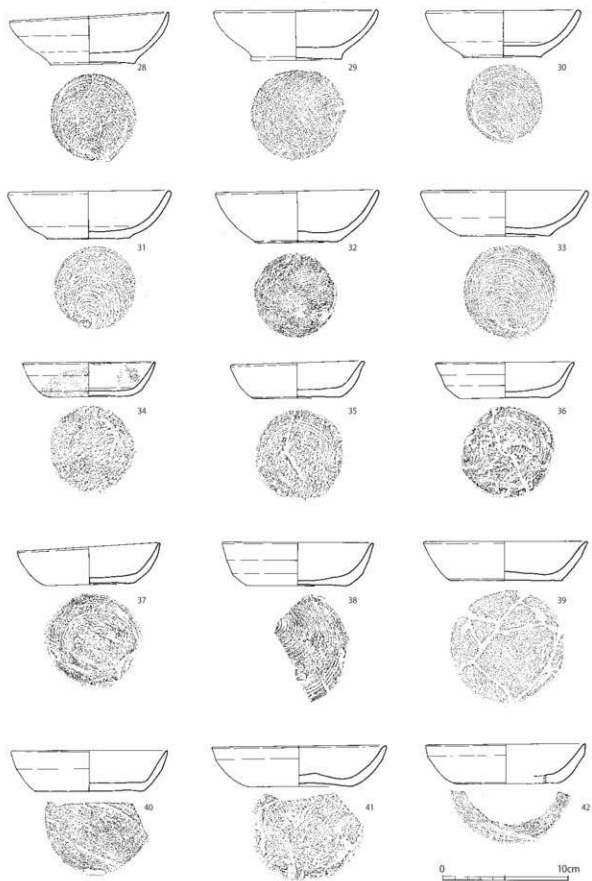
S63～T63区に位置する大型の土坑である。掘り下げの初期段階では東西23m、南北3.7、深さ0.15mほどの範囲で、瓦片を主体とした遺物が多量に出土した。出土瓦については大型破片も多く、「瓦溜め」の様相を呈していた。瓦類の取り上げを行った後、この面より下層で大量の土器が出土始めた。土器についても完形品や破片が集中する部位があり、「土器溜め」の様相を呈して



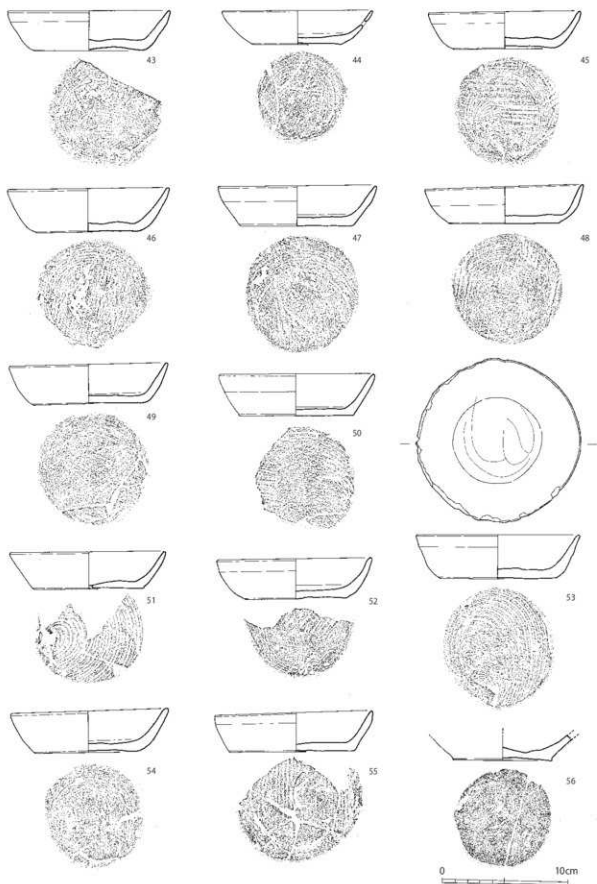
第7-110図 10-SK150実測図(1/40)



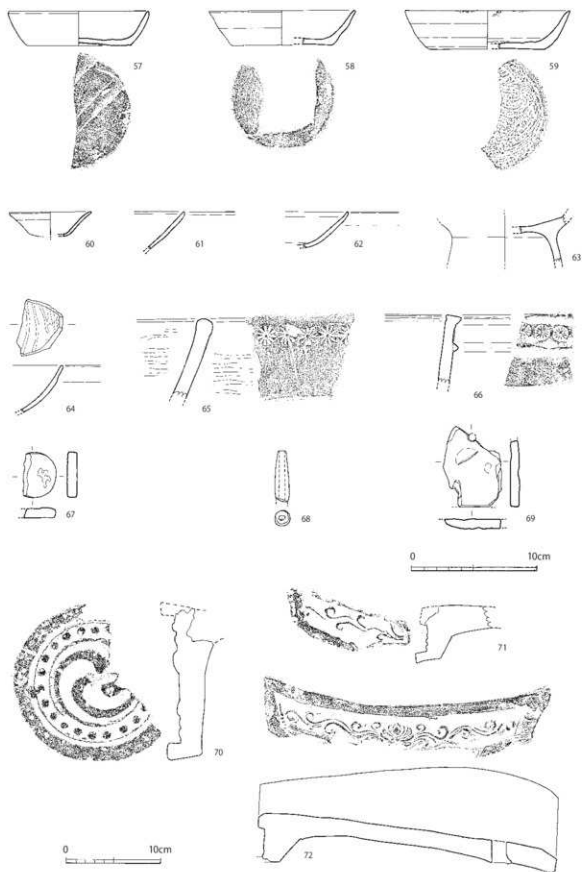
第7-111図 10-SK150出土遺物実測図①(1/3)



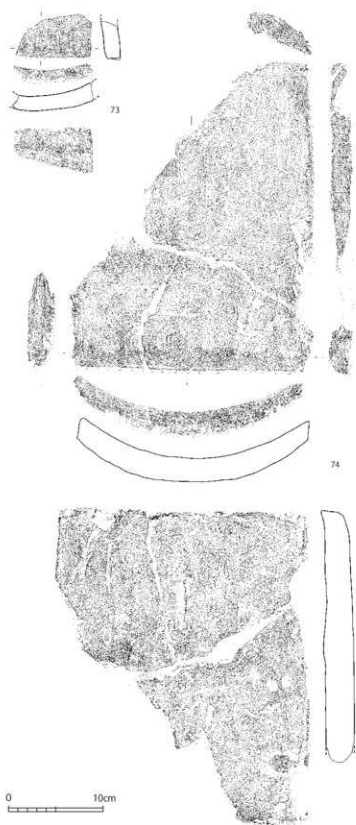
第7-112図 10-SK150出土遺物実測図② (1/3)



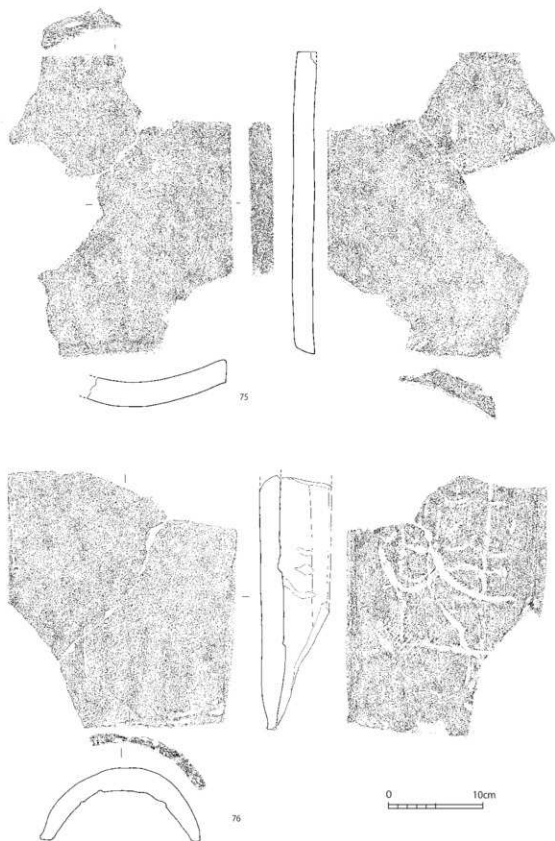
第7-113図 10-SK150出土遺物実測図③ (1/3)



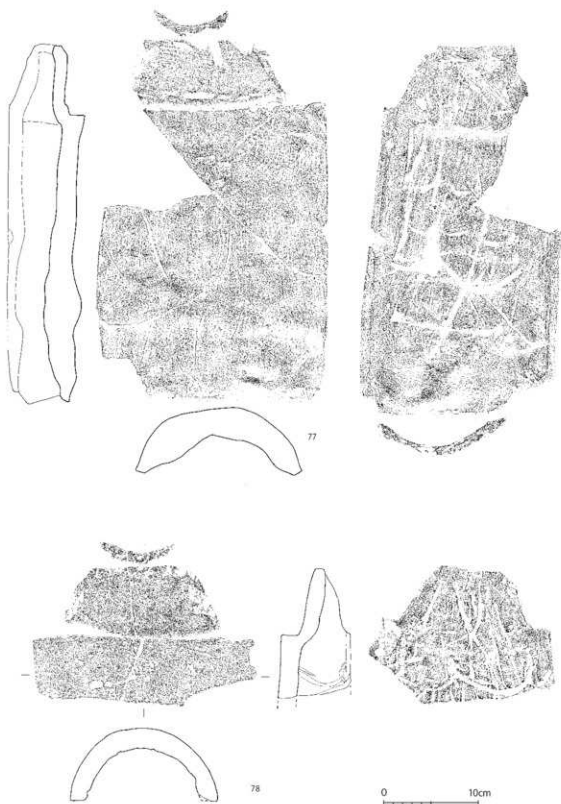
第7-114図 10-SK150出土遺物実測図④ (1/3、1/4)



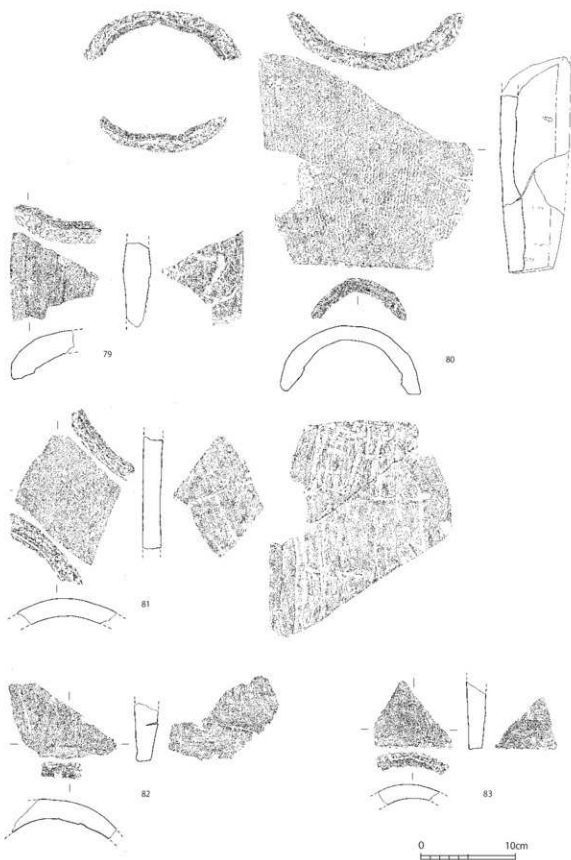
第7-115図 10-SK150出土遺物実測図⑤ (1/4)



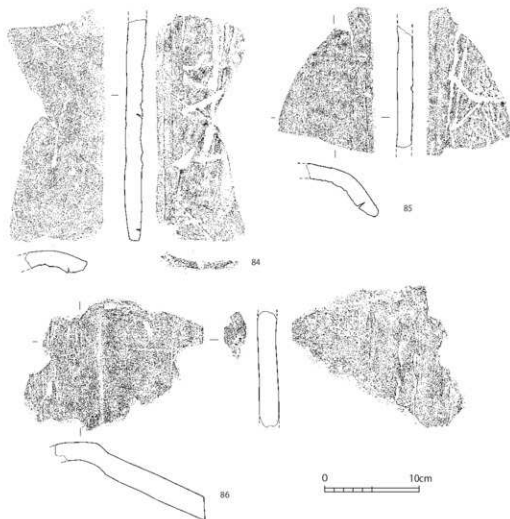
第7-116図 10-SK150出土遺物実測図⑥ (1/4)



第7-117図 10-SK150出土遺物実測図②(1/4)



第7-118図 10-SK150出土遺物実測図①(1/4)



第7-119図 10-SK150出土遺物実測図⑨(1/4)

上層の
「瓦溜め」
下層の
「土器溜め」

いた。本来、上層の「瓦溜め」と下層の「土器溜め」は遺構の規模と時期が異なるものであり、両者を判別して調査すべきものであったが、互いの遺構埋土が類似しており、「瓦溜め」と「土器溜め」の遺物を一括して取り上げてしまった。このような調査の進展の中で、上層の「瓦溜め」と下層の「土器溜め」の規模やプランが不鮮明となってしまい、率直にいて発掘調査時の不備を認めざるを得ない状況となった。下層の「土器溜め」については、調査途中で遺跡の保護が確定したため、完掘していない。出土遺物の年代から、上層の「瓦溜め」についてはⅢ～Ⅳ期（14世紀末～15世紀）、下層の「土器溜め」についてはⅠ期（14世紀前半）に比定される。

10-SK150出土遺物（第7-111図～第7-119図）

1～69は下層の「土器溜め」からの出土遺物である。1は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部で、内面に片彫りによる花文様が認められる。12世紀代の製品。2・3は中国龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗で、13世紀代に比定される。4・5は中国産白磁で、4は碗の底部、5は蓋である。6は備前焼大甍の口縁部、7は信楽焼大甍の胴部である。8～29は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕、もしくは糸切り痕のみが認められる。28～59は土師質土器坏である。このうち、28～30・35・37・38・41・52～54・56には胎土に金雲母を含む。さらに、28～33は口縁部が内湾することで、体部が丸味をもつなど、古相を呈する資料である。その他、44は体部に貫通孔を設ける、53は口縁部に意図的な打ち欠きを有する、59の口縁端部内外面にススが付着するなどの特徴

がある。60～62は京都からの搬入品で、60は小皿、61・62は皿Sである。63は器種不明であるが、脚台部の破片である。64は和泉型瓦器塚の口縁部、65・66は瓦質土器火鉢類の口縁部である。64は12～13世紀代、65・66は14世紀後半から15世紀代の製品であることから、混入品であろう。67は土器片を半円形に再加工した製品、68は管状土錘である。69は滑石製品の破片で、円形の貫通孔が設けられている。

70～86は上層の「瓦溜め」からの出土遺物である。70は軒丸瓦、71・72は軒平瓦である。73～75は平瓦。73については小型の製品であり、端面に「井」字状の刻印がある。76・77は丸瓦である。78は丸瓦の玉縁部付近の破片であるが、当該部位を意図的に分割して、面戸瓦として使用された製品である可能性が高い。凹面には吊り紐痕が認められる。79～85も丸瓦であるが、凹面側から斜め方向に分割線が施されており、これらについても面戸瓦として使用されたものと推定される。端縁には凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が残る資料がある。86は雁振瓦である。

面戸瓦

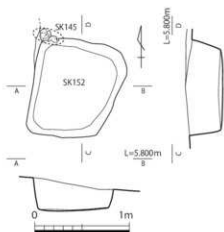
10-SK152 (第7-120図)

U65区に位置する遺構である。発掘調査時の所見に従えば、遺構の形態は東西0.9m、南北1.05m、深さ0.35mの略方形の土坑である。遺構の北西隅、すなわち前述した10-SK145に隣接する地点から、土師質土器環が出土した。このような状態から解釈すると、SK152の出土遺物は、本来SK145と一連のもので、SK152とした遺構自体は近年の攪乱と推定される。SK145に帰属する一括資料が、SK152の構築によって原位置を動かされたものであろう。出土遺物の年代は、1期（14世紀前半）に比定される。

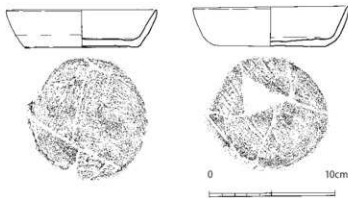
10-SK145の
帰属遺物
10-SK152は
近年の攪乱

10-SK152出土遺物 (第7-121図)

1・2は土師質土器環で、底部外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。



第7-120図 10-SK152実測図(1/40)



第7-121図 10-SK152出土遺物実測図(1/3)

10-SK156

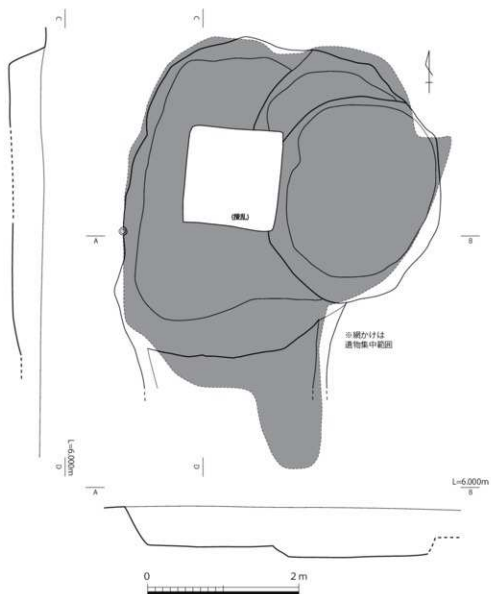
T63区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西1.8m、南北1.9m、深さ0.25mで、中央部は攪乱によって破壊されている。埋土は暗褐色系の単一土壌で、炭化物などを少量含む。埋土中から瓦片などを主体とする遺物が一定量出土したが、出土遺物の中に遺構の詳細な年代を示唆するものは認められなかった。

10-SK156出土遺物 (第7-122図)

図示した遺物は、軒丸瓦の破片である。



第7-122図 10-SK156出土遺物実測図(1/4)



第7-123図 10-SK160実測図 (1/50)

10-SK160 (第7-123図)

W64区に位置する大型の土坑である。その規模は東西42m、南北56.5m、深さ0.65mで、中央部のやや北西寄りには攪乱(コンクリート基礎)によって破壊されている。瓦の大型破片が集中して廃棄された「瓦溜め」で、出土遺物の大多数が瓦埴類であるが、土器片や銅銭なども少量含まれる。廃棄された瓦の平面分布の状況を見ると、少なくとも2回以上の廃棄が認められるようであるが、それぞれの廃棄の単位を明らかにすることができなかったため、遺物については一括して取り上げてしまっている。また、完掘状況を見ると、3単位以上の土坑が重複して掘られたようにも観察できるが、瓦の廃棄は極めて短い期間に行われた可能性が高いと考えている。出土瓦は軒平瓦については万寿寺創建時のものが多いが、それ以外のものも含まれる。また、表面に赤彩が施された鬼瓦の大型破片も注目される。出土遺物から、遺構の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。

10-SK160出土遺物（第7・124図～第7・142図）

第7・124図1～3は中国産白磁碗で、1・2は口縁部、3は底部である。4は中国産青磁瓶の口縁部で、端部を上方に立ち上げる。5は瀬戸美濃産陶器即鉢の口縁部の破片で、胴部内面に沈線による節目が施されている。6・7は管状土錘で、いずれも上端部を欠損する。

8～15は瓦質土器の製品である。8は風炉の胴部破片と推定されるもので、外面に刻印による文様と円形の透かし窓を有する。内面には指頭圧痕が認められる。9～13は播鉢で、いずれも口縁端部に肥圧面を作出している。12については胴部外面に刷毛目状の調整を行い、内面には5条を一単位とする播目が施されている。底部内面にはカキ目状の工具による渦巻き状の調整を施し、底部外面には板状圧痕(?)が認められる。14は甕の口縁部で、胴部からそのまま直線的に立ち上がる口縁をもつが、口縁部が肥圧し、その端部を内側につまみ出している。内外面にはナデによる調整が行われている。15は器種不明であるが、花瓶の脚部である可能性が高い。脚部には面を作出しており、外面に刻印による文様を捺する。

第7・125図～第7・142図1～84は瓦埴類である。1～20は万寿寺創建時に使用された蓮華唐草文軒平瓦である。このうち、19は顎貼付技法が観察できる資料で、接合面に「×」字状の沈線を施すことによって、接合を強固にする工夫がなされている。20の凹面には刷毛目状工具(?)によって、布目を消す調整がなされていることが観察できる。21・22は半載四菱唐草文軒平瓦で、15世紀代に比定される資料である。23～43は軒丸瓦で、凹面に吊り紐痕や糸切り痕(コビキ痕)が観察できる資料が存在する。また、23～26は万寿寺創建時に使用された巴文軒丸瓦で、蓮華唐草文軒平瓦とセットになる製品であろう。

44～49は鬼瓦である。この中で、47と48には周縁部に大きな円柱状の珠文を配するのが特徴で、48には珠文間に小さな釘穴が設けられている。45と49には外面に赤彩が施されている。特に49は大型の破片で、窪みを設けた眼をもち、残存部の表面のほぼ全面に赤彩を施した注目すべき資料である。

50～62は平瓦で、糸切り痕などの製作痕跡やナデや板状工具による調整痕が認められる資料がある。また、51・56・57には釘穴、62には凹面に赤色顔料の付着が認められる。さらに、52・54・58については、破面のラインが側縁と平行になっている傾向が認められることから、製斗瓦として使用された可能性が考えられる。65～81は丸瓦で、凹面に糸切り痕や吊り紐痕が観察できる資料がある。このうち、70～81については、凹面から端縁と平行、もしくは斜め方向に分割線が施されており、面戸瓦として使用された製品である。端面が残存している資料には、当該部位に分割線と分割破面が認められる。82は雁振瓦である。83は平瓦であるが、端縁が斜め方向に截断されている資料である。84は埴である。

第7・142図85～88は石製品で、85・86は砥石、87・88は滑石製石鍋の破片である。このうち、特に87は口縁部付近の破片を断面形態が「凸」字状になるように加工されている可能性が高いことから、石鍋の補修具¹¹⁾として使用された可能性が考えられる。ただし、滑石製石鍋は12～13世紀代に製作され、流行した製品であることから遺構の年代と整合しない。そのため、当該遺物は混入品と考えている。同図89は初鑄造年621年の唐銭「開元通寶」である。

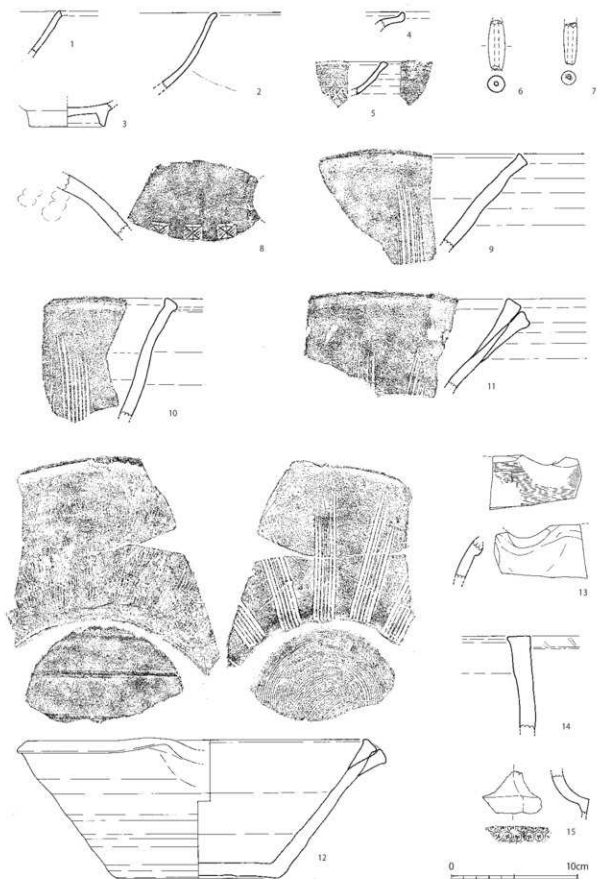
赤彩が
施された
鬼瓦

製斗瓦

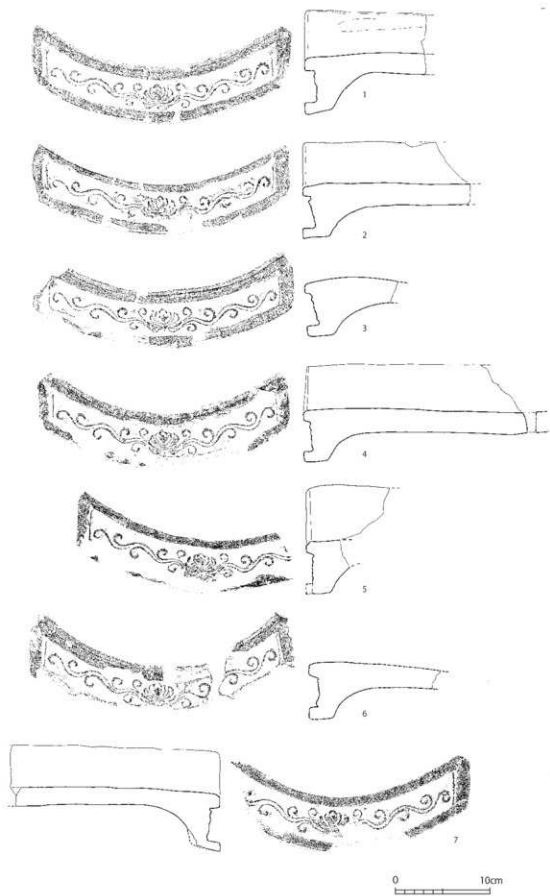
面戸瓦

註(1) 松尾秀昭「石鍋が語る中世—ホグット石鍋製作遺跡—」(シリーズ「遺跡を学ぶ」)22 新泉社2017年)

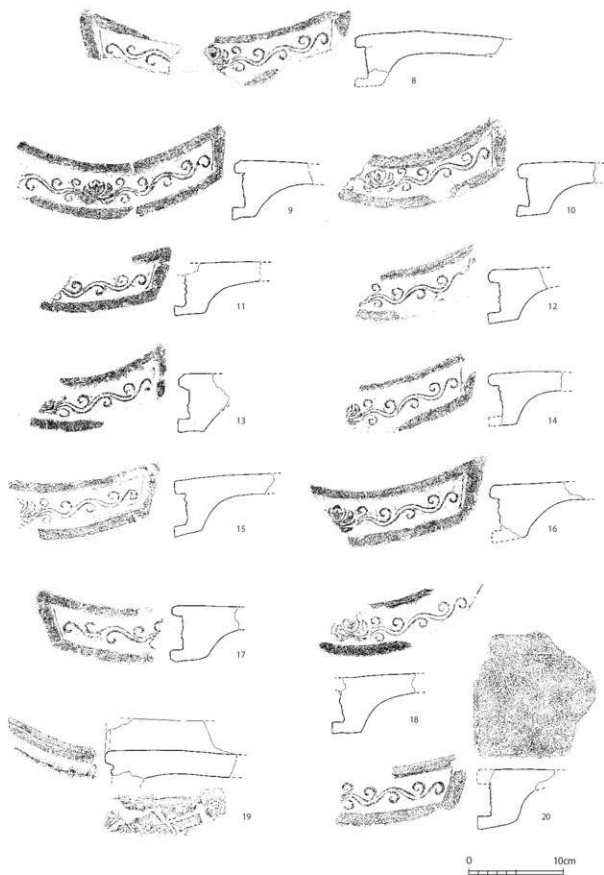
松尾秀昭「石鍋の補修具とは—バレン状石製品—」(『西海考古』第7号 2007年)



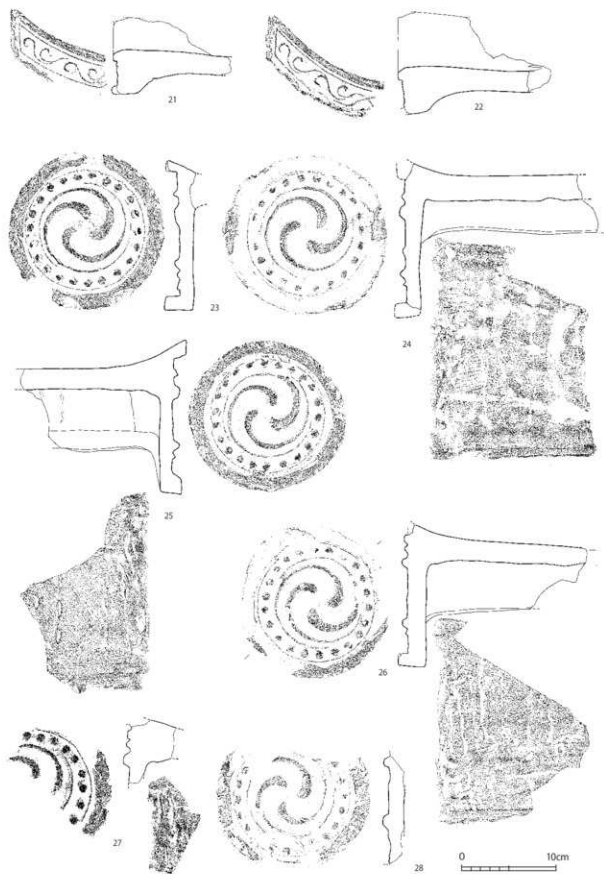
第7-124図 10-SK160出土遺物実測図① (1/3)



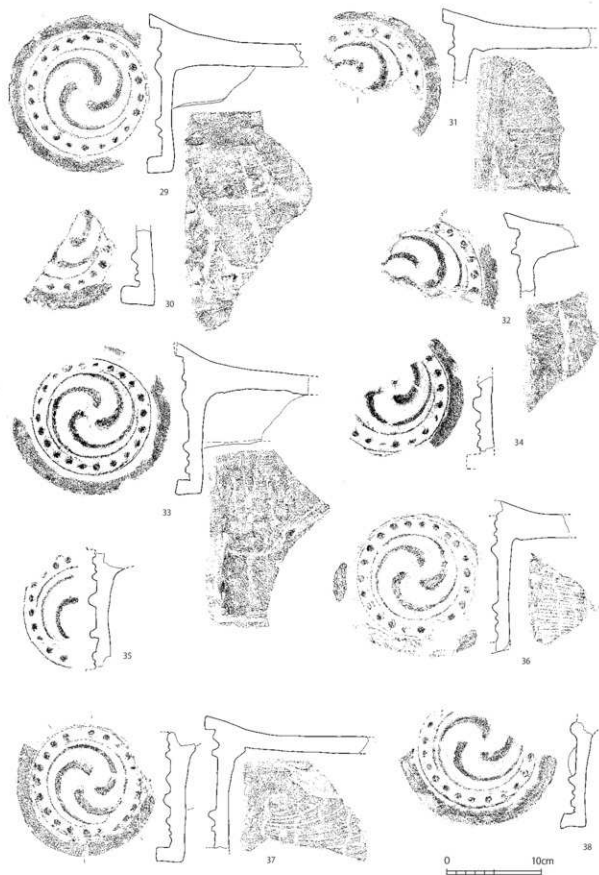
第7-125図 10-SK160出土遺物実測図② (1/4)



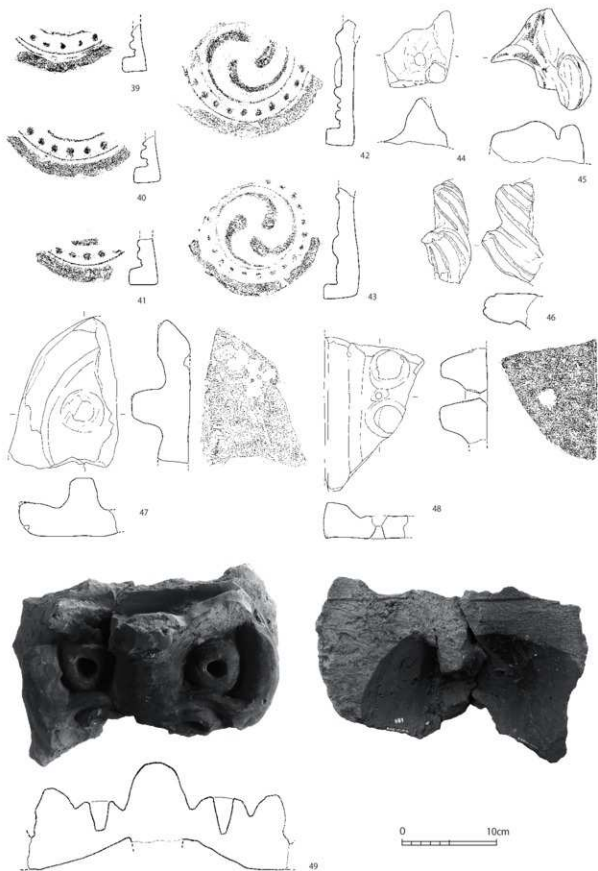
第7-126図 10-SK160出土遺物実測図③ (1/4)



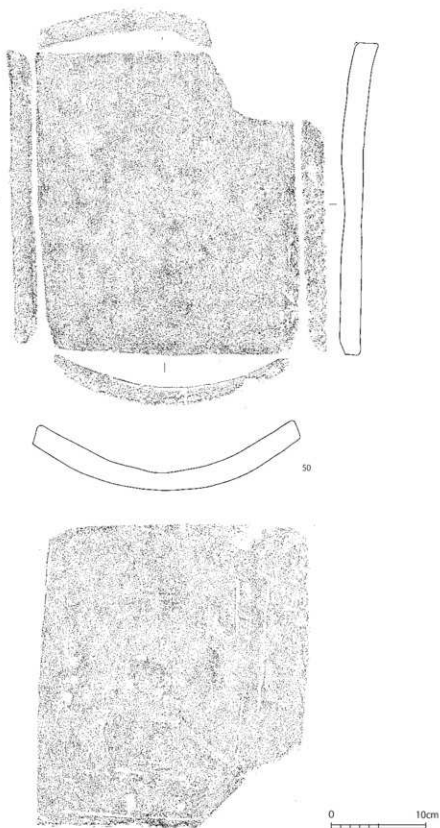
第7-127図 10-SK160出土遺物実測図④(1/4)



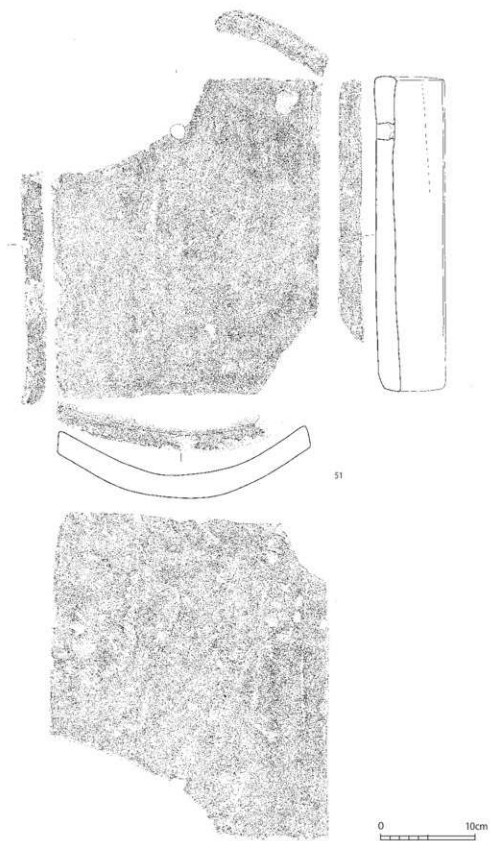
第7-128図 10-SK160出土遺物実測図⑤ (1/4)



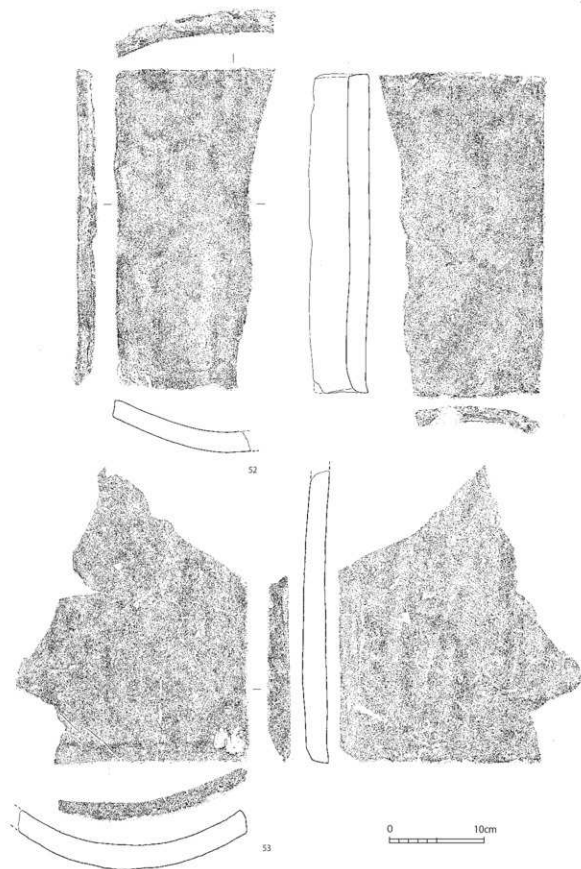
第7-129図 10-SK160出土遺物実測図⑥ (1/4)



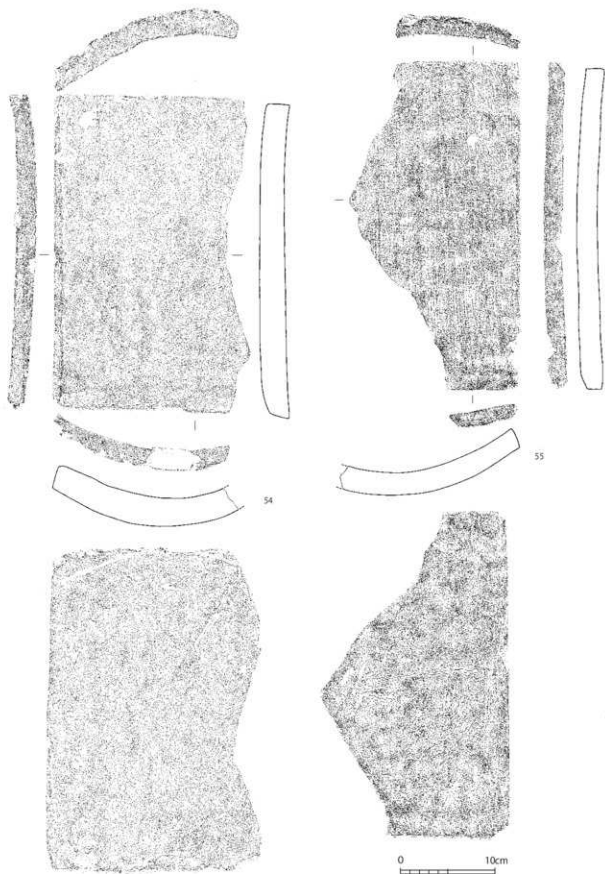
第7-130図 10-SK160出土遺物実測図② (1/4)



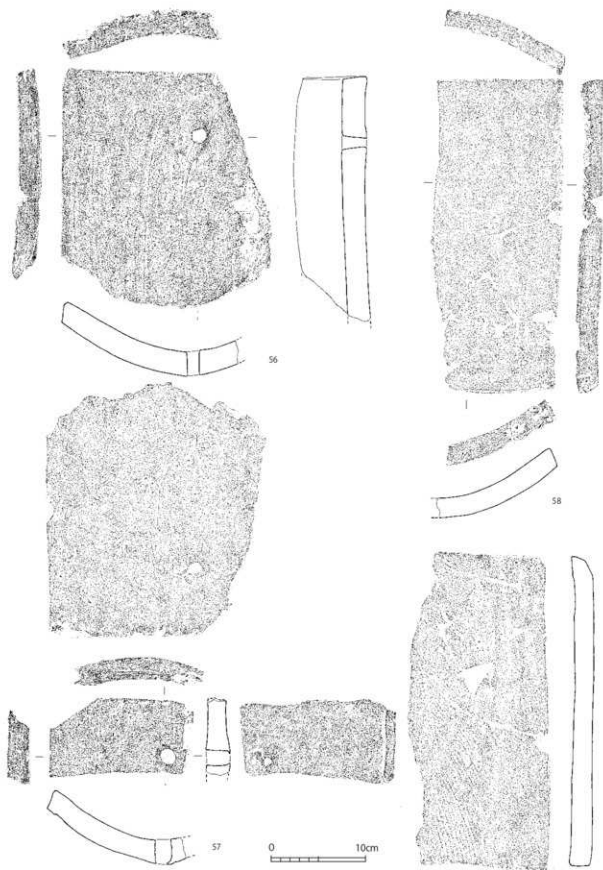
第7-131図 10-SK160出土遺物実測図⑧ (1/4)



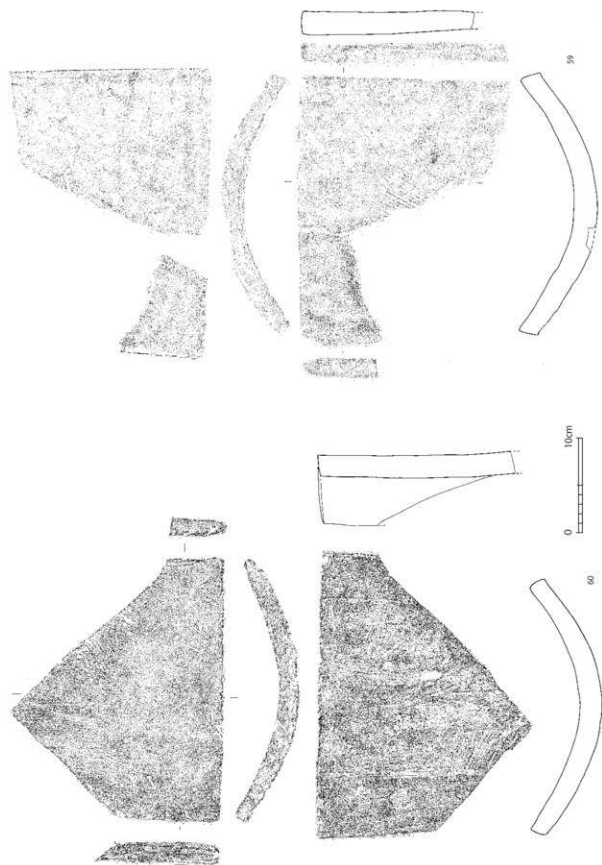
第7-132図 10-SK160出土遺物実測図⑨ (1/4)



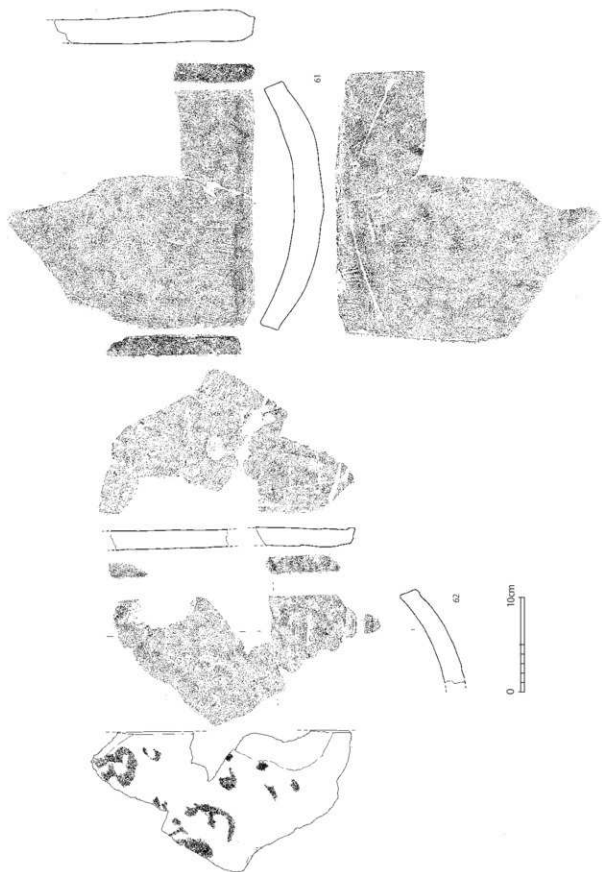
第7-133図 10-SK160出土遺物実測図⑤ (1/4)



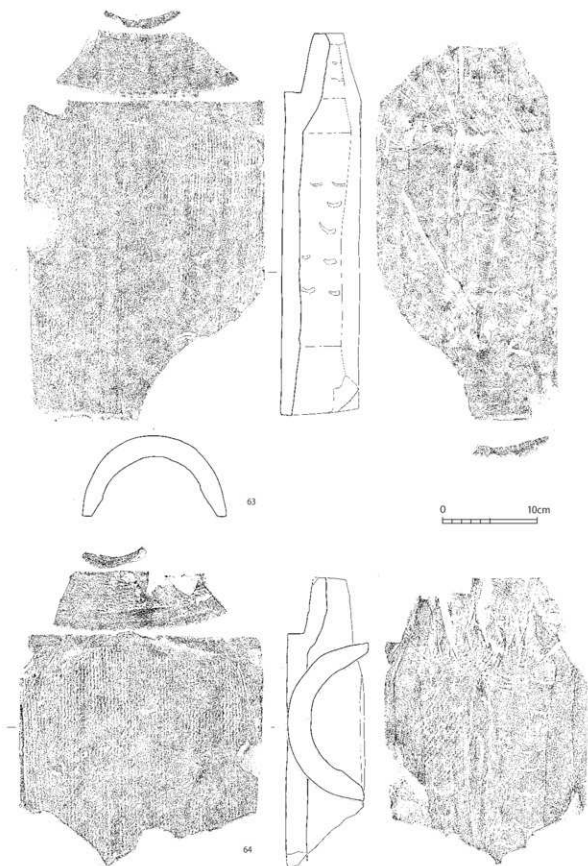
第7-134図 10-SK160出土遺物実測図①(1/4)



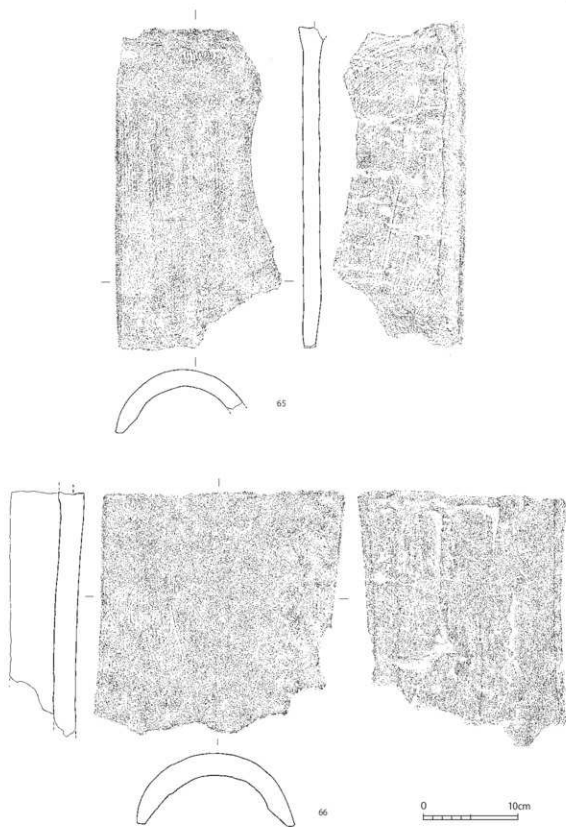
第7-135図 10-SK160出土遺物実測図② (1/4)



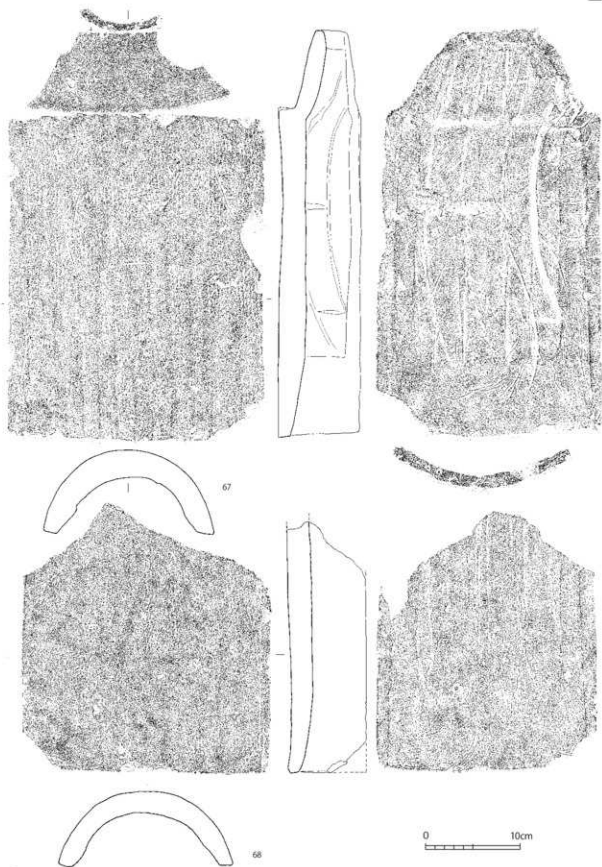
第7-136図 10-SK160出土遺物実測図③ (1/4)



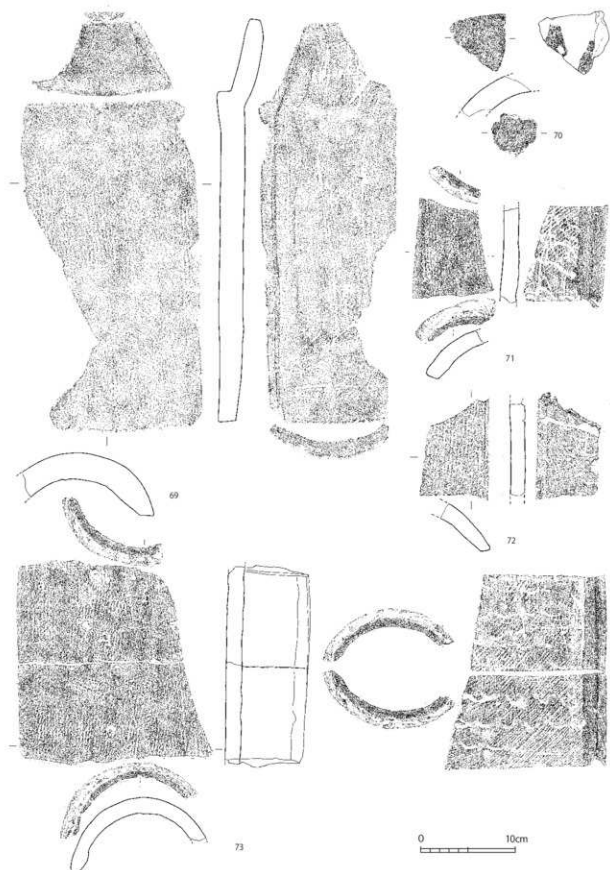
第7-137図 10-SK160出土遺物実測図⑩ (1/4)



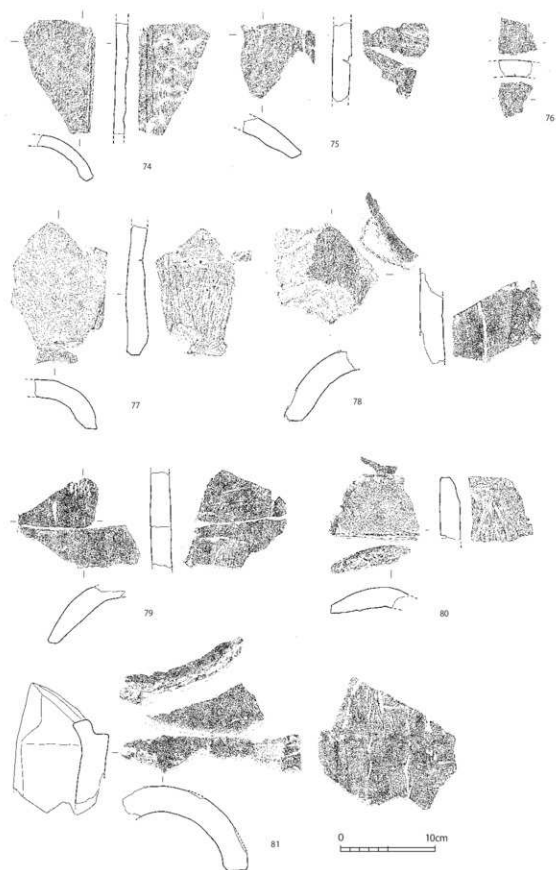
第7-138図 10-SK160出土遺物実測図⑤ (1/4)



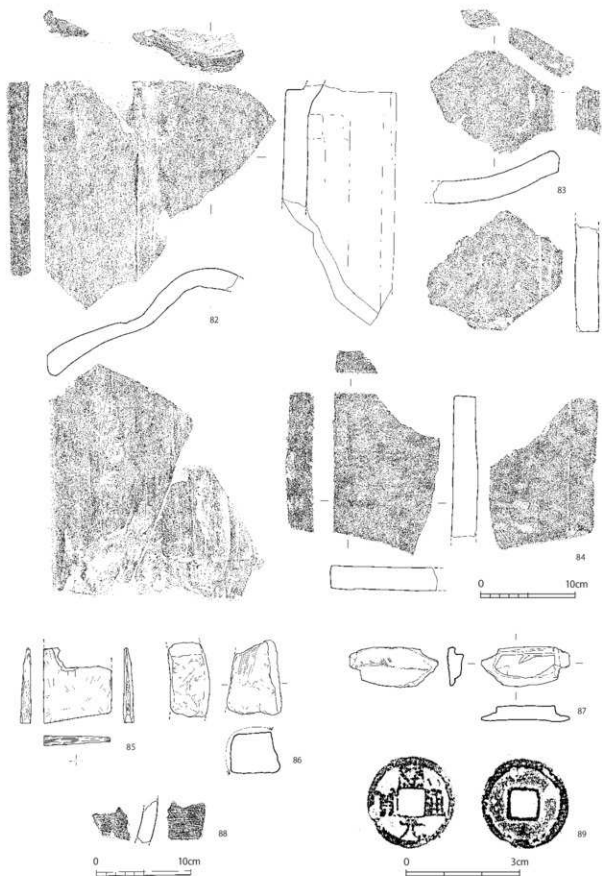
第7-139図 10-SK160出土遺物実測図⑩(1/4)



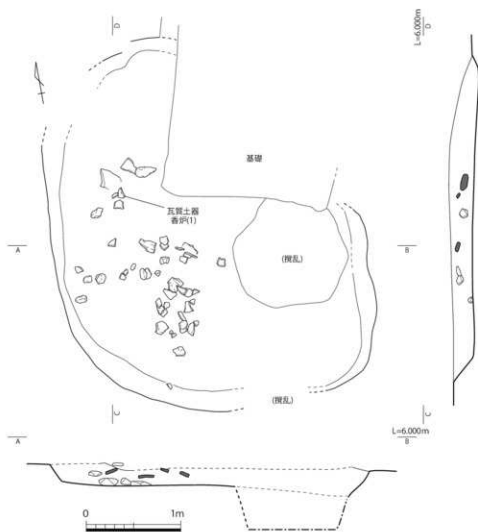
第7-140図 10-SK160出土遺物実測図⑦(1/4)



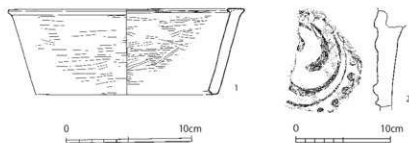
第7-141図 10-SK160出土遺物実測図⑧(1/4)



第7-142図 10-SK160出土遺物実測図⑧ (1/4、1/3、1/1)



第7-143図 10-SK165実測図 (1/40)



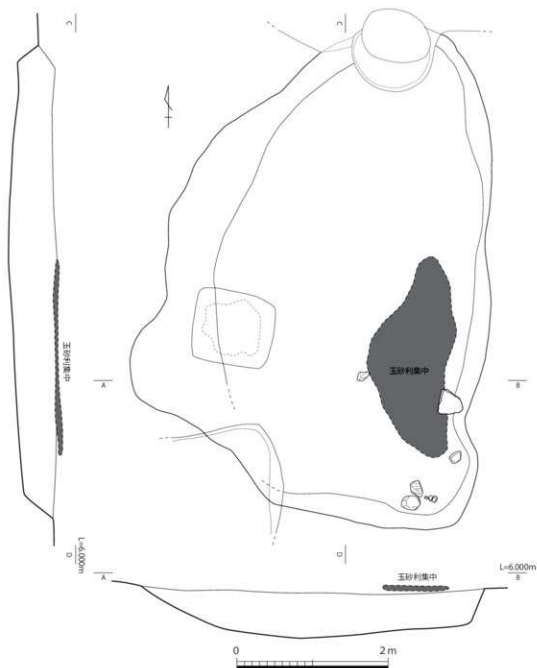
第7-144図 10-SK165出土遺物実測図 (1/3、1/4)

10-SK165 (第7-143図)

T63区に位置する土坑で、遺構のプランは不整形である。その規模は東西3.35m、南北4.0m、深さ0.18mで、遺構の北東側はコンクリート基礎、中央部東寄りには攪乱によって破壊されている。土坑の南西側に偏って土器片、瓦片、礫などが少量出土した。出土遺物が僅少であるため、遺構の詳細な年代を把握するのは困難であるが、Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定しておきたい。

10-SK165出土遺物 (第7-144図)

1は瓦質土器香炉で、胴部内外面にミガキ調整がなされている。2は軒丸瓦の破片である。



第7-145図 10-SK166実測図 (1/50)

10-SK166 (第7-145図)

T64区に位置する大型の土坑で、遺構のプランは不整形である。その規模は東西4.4m、南北6.6m、深さ0.6mである。遺構の北端部を時期不明の土坑によって破壊されているほか、中央部西寄りの床面を近年の攪乱によって破壊されている。埋土はわずかな色調や性状の違いから6層程度に分层されるが、いずれも小石や砂利を含む。特に、遺構の検出上面東側では小石や砂利が集中している部位が認められた。遺構の規模と比較すると出土遺物の量は少ないが、土器片・瓦片などがあり、小石や砂利の分布域の付近に集中している傾向が認められる。出土遺物から、遺構の年代はⅠ期～Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。